

一枚の絵との不思議な出会い

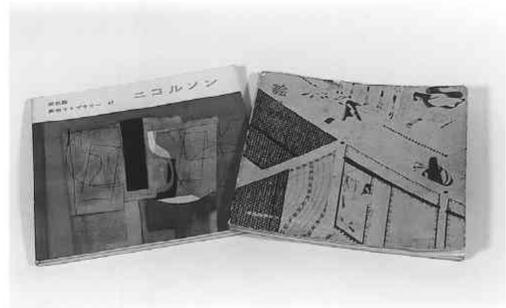
商経学部教授 中村 進

I

30代、40代の頃はそうではありませんでしたが、年齢が50代にさしかかり、私の同年代の友人や知人がちらほらと亡くなってきますと、人の死とか、それに深い関係にある宗教や信仰の問題を意識するようになりました。とりわけ今年の3月に同年代の親しくくださった商経学部の同僚、森博隆先生の全く予期していなかったご逝去に接し、その意識は益々強くなって来ました。日頃、宗教や信仰について関心がないように振る舞われていた先生が病院でご自分の手に数珠をかけていらっしゃったのが、今、私の心を強く捉えています。秋のお彼岸を迎えた機会に、とりとめもなく人の信仰の問題を私のふだん、楽しみ親しんでいる絵をとおして愚考する次第です。

II

小学校高学年の担任が美術の先生でした。その先生の影響でしょうか、私は絵を描くのも見るのも好きでした。この頃、みすず書房から全34巻（第1期）の『原色版 美術ライブラリー』という画集が刊行され（写真1）、私もこのシリーズを買い込み、初めて見るP.クレイやB.ニコルソンやG.ブラックなどの現代絵画に深い感銘を受けたことを覚えています。この1955年に配本が開始された『原色版 美術ライブラリー』は日本の画集出版の歴史において戦後最初の廉価で当時としては希有なオールカラーの美術書（みすず書房編集部編『みすず書房の50年』みすず書房、1996年、14頁）であったという点で画期的な企画であったと思



（写真1） 戦後の美術書出版史において画期的な企画であったみすず書房の『原色版 美術ライブラリー』

います。まだまだ美しいものに対する憧れが満たされなかった終戦から年月があまり経過していなかった時期にこの画集をとおして世界の一般の絵画や彫刻を身近なものにした人々は私たちの世代には随分たくさんいたはずですが、長ずるに及んで、画集では満足できず、自ら絵を購入し集めることが私の趣味に加わりました。もちろんその収集は私の限られた収入の範囲内で、気に入った絵に巡り会えば、買い求めるという程度です。

今、持っている作品のなかでとくに私の好きなものは昨年亡くなられた日本画家、正井和行画伯の絵画です。正井さんは明治43年に兵庫県明石市に生まれ、京都絵画専門学校を卒業、戦後、日展を中心に活躍なされた画家でした。またこの人は若い時代から福田平八郎画伯を師事され、福田画伯の晩年まで続いたその暖かい師弟関係を示す数々の興味深いエピソードは正井さん自身が昭和58年10月22日の山種美術館土曜講演会で披露されています。人を飽かせない淡々とした語り口で進行して

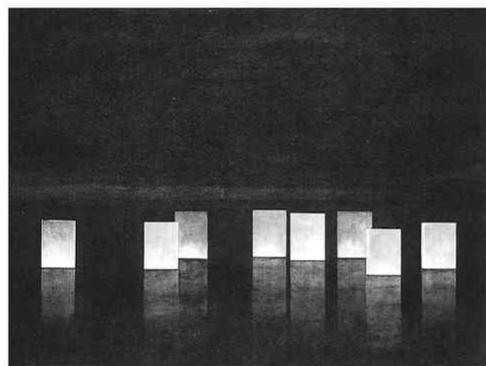
たようでした。きっと近畿大学中央図書館が所蔵している主として江戸時代の旅行案内から成る島本文庫の和本（写真3）などは喜んで読まれたように思います（この島本文庫については今田洋三「200年前のベストセラーズ—島本文庫の名所図会類—」『香散見草』14・15合併号、1990年や藤田喜六「島本文庫について—近畿大学中央図書館蔵—」『商経学叢』第22巻第2号、近畿大学商経学会、1977年を参照）。

正井さんは日展で入選を重ねられ、昭和60年に日展会員になり、平成元年に京都市芸術功労賞を、翌年に京都府芸術功労賞を続けて受賞、平成4年に日展参与に就かれました（日展の組織については「〈日展〉の権威」『芸術新潮』新潮社、1985.2、98-126頁を参照）。その間、日展の審査員を何回かしておられます。こうして名実ともに日本画壇を代表する一人になられたのですが（佐藤直司「正井和行人と芸術」『静謐のなかの心象の世界 正井和行展』大分県立芸術会館、平成7年、13頁）、惜しくも平成11年5月12日に永眠されました。

III

正井さんがどのような信仰を持っておられたかはついぞ尋ねる機会はありませんでしたが、日々の生活で信仰を疎かにされていなくは確かでした。お家に伺った際に、ちょうど印刷会社から郵送されてきた自分の作品の絵はがきをまず仏壇に捧げられ拝まれている姿を私は目撃していますし、正井さんが風景を描かれる時、その対象は様々でしたが、直接、宗教的な題材を扱われた作品が何点か残っています。例えば二度目の日展特選に輝いたインド南端の海岸にあって観世音菩薩の住む伝説上の霊山、補陀落へ往生を願う僧たちが那智の海に決死の船出を試みたという説話（佐藤直司、前掲論文、12-13頁）をもとにして構想された「補陀落の海」や夜の那智の滝を主題にした「那智」や法隆寺の百済観音の慈悲深いお姿をうつした「百済観音」などの作品はまさにその範疇に属するものであると

思います。また「流燈」（写真4）という作品については自分の祖先の幼くして亡くなった子どもたちの戒名をこの絵の下塗りのおり一つ一つ書き込み供養したと回想されています、8月16日の大文字の送り火を素材にされた第26回改組日展（平成6年）の出品作「送り火」に関しては、この年に死去された二人の日展の役員の遺作と偶然美術館の同じ部屋に飾られたことにより、この絵が亡き二人の画家のためのよい供養になったと述懐されています（正井和行「回想」『静謐のなかの心象の世界』85頁）。これらの心温まる話のなかに私は芸術家における一つの信仰心の表し方を感じ取り、このように自己の気持ちを率直に表現する手段をもつ芸術家の仕事に強い羨望を抱くのでした。



（写真4） 作者の祖先の幼くして亡くなった子どもたちの戒名がこの絵の下塗りのおりに、書き込まれた第17回日展出品作「流燈」（1985年制作）

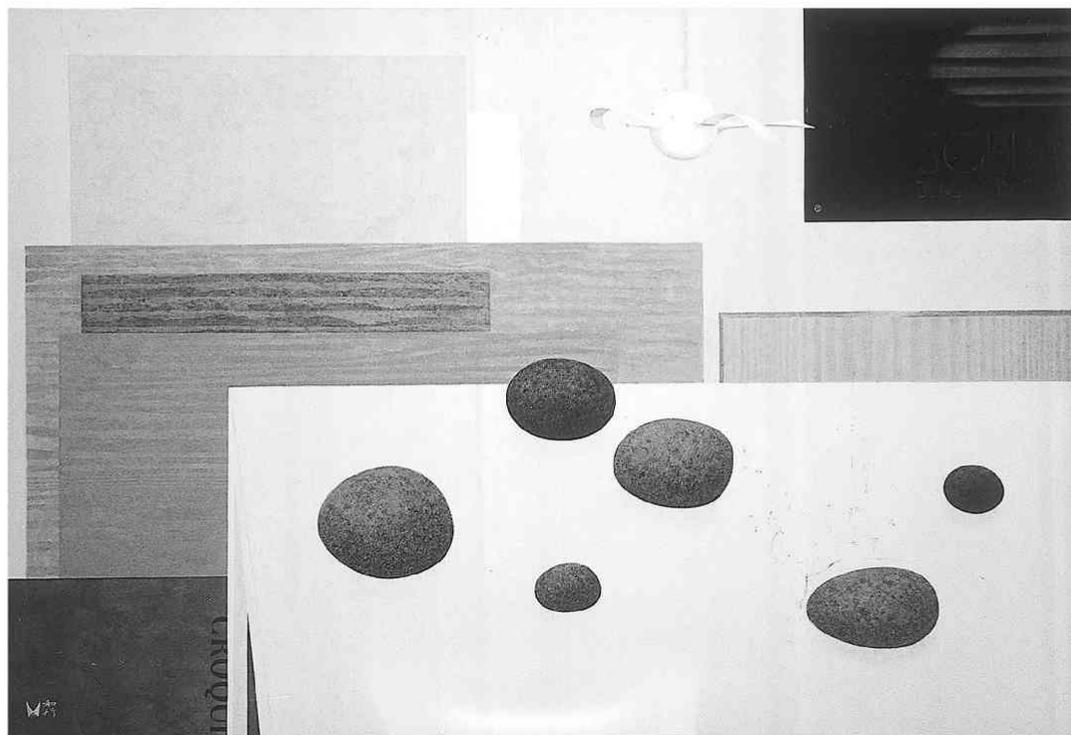
IV

つぎに、正井さんの絵と私の不思議な巡り合わせをお話いたします。正井さんとよくお会いしていた頃、ご自分の仕上がったばかりの力作の写真を私にくださいました。何枚か頂いた写真のなかに非常に気に入った絵がありました（写真5を参照）。それは見るものを惹きつける、極度に知的に構成された抽象絵画でした。その時はこのような大作の入手は夢のようなことだと思い、その写真を額に収め、机上に置き、いつも眺めていました。手に入れたという気持ちを強く持ちながら、

今ではその絵は誰かの所有物になっていることだろうと考え、その入手はすっかり諦めていたわけです。そして22年が経過しました。数年前、大津の某百貨店で貴金属品や時計、絵画陶器などの催し物が数日間開かれました。絵画には関心がありましたのでこの百貨店に行ったとき、偶然、その催しの会場を訪れたのでした。その日は催事の最終日でした。会場になっている部屋の隅に1枚の見覚えのある絵が掛かっていました。それこそはながい間探し求めていた正井さんの80号の作品、「机上」（この絵は最初「習作」として正井さん所属の昭和48年の第18回青塔社展に出品され、その後、「机上」と言う画題がついたと想像できます）でした。しかもこの絵は催し会場の壁面があいていたために、最終日の午前中に京都の画商が持ち込んだものだという事でした。だからもし私がこの催事場へその日の午後以前に訪れていたならば、また百貨店に行って本来の目的を果たし絵の展示場所へ行くのを怠っていませんでしたなら、憧れの正井さんの絵に直面してい

なかったわけです。いくつかのこうした仮定を乗り越えて、私はこの大津において写真ではなく本物のこの作品に再会できたのです。この邂逅に感激し、感謝して、熟考の末、「机上」を買い求めました。今はそれを部屋にかけて、毎日、眺めています。この作品は私の好きなイギリスの画家、B.ニコルスンを彷彿とさせ²⁾、その画面は正井さんが日頃の愛用されていたと思われる品々で緻密に組み立てられ、見ている少しも飽きなく何か語りかけてくれているような絵です。そして、この絵を見るたびに、その有り難い出会いを思い起こしています。私にとっては本当に不思議な巡り合わせでした。

骨董収集でも有名な白洲正子さんが自分の欲しいと思うものはその気持ちをずっと持ち続けられ、いつの日か向こうからそれが自分の方にやって来て、必ず手に入れることが可能であると書いておられたように記憶していますが、私が常に心の隅で気に止めていてとうとう持つことができた正井さんの作品は、



(写真5) 正井和行「机上」(1973年制作)

この白洲さんの指摘のように、絵の方から私に寄り添って来てくれたのでした。このような宿命的とも感じられる出会いについては、不可思議な縁として仏典のどこかに見つけることができるような気がします。

ひとりの親しかった同僚のあまりにも早すぎる死に接し、私は人の信仰の問題についてこのように思索を試みたのでした。

(2000. 9. 23)

注

- 1) 正井さんの作品には美術館や画廊だけではなく、氏は数多くの本の装丁や挿し絵を手がけられていましたので、その領域においても接することが可能です。私の手許には正井さんの装丁による松本清張『岸田劉生晩景』新潮社、昭和55年、水上勉『釈迦浜心中』新潮社、昭和48年、海音寺潮五郎『さむらいの本懐』新潮社、昭和50年、渡辺淳一『まひる野』全2巻、新潮社、昭和52年などの書物があります。なお、松下幸之助の著書、『商売心得帳』PHP研究所、昭和48年や『経営心得帳』PHP研究所、昭和49年のために正井さんはおよそ100枚のカットを描かれています。それらの一連の3センチメートル四方にも満たない洗練された小さなカット絵は紛れもなく正井和行の世界を読者の前に繰り広げています。またそれら小品のなかに日常、正井さんがどのようなモノに注意を向けておられたかも見いだせて興味が尽きません。
- 2) ベン・ニコルスンは正井さんのお好きな画家の一人でした。原色版美術ライブラリーのなかの1冊に『ニコルソン』（みすず書房、1957年）があり、それを見ながら、ニコルソンの白について解説されたことを懐かしく思い出します。実際、正井さんは白に関心があり、今年の8月に死去された洋画家、清川泰次氏の『白の世界』（美術出版社、昭和48年）をお持ちしたら、彼の作品に大きな共鳴を示されたことを覚えています。ついでながら原色版美術ライブラリーのシリーズの1冊にニコルスンが選ばれたことはその後、彼の個展のため用に準備された図録の発行は別にして、彼個人の画集を日本のどの出版社も企

画しなかったという事実から、このシリーズの企画者の高い見識に敬意を表します。このようなわが国の出版事情でありましたので、私は1999年の冬、南スペインの旅行中、グラナダの書店で偶然、ニコルスンの小さな画集を見つけ、正井さんにお送りすると大変喜んでおられたことが心に残っています。